
自由きままに異世界記・・・と熊

黒部 愁矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由きままに異世界記・・・と熊

【Zコード】

Z5673Z

【作者名】

黒部 愁矢

【あらすじ】

高校一年生だった、主人公は先輩と山登りをしていると、熊に追われることになり。異世界に転生してしまう羽目になりました。

突然異世界に放り込まれた主人公がそれなりに楽しみながら生活していく、のんびりと元に戻る方法は期待せずに探す物語です。

作者の語彙力が半端なく乏しいため、生暖かい目で「こいつ変な言葉の使い方してやがる」って感じに笑ってやってください（＾＾；

）

プロローグ（前書き）

「んにちは、」ひかりに初めて小説を投稿をせても「ひづ黒部 愁矢で

この小説は主人公がのんびり生活するものですが、意外とノリで進む場面もあるはずですので気軽に楽しく読んで頂けたら幸いです。

プロローグ

「なんでいつなつた・・・」
必要最低限の家具しか置かれていない質素な部屋で3歳ほどの少年
は子供らしい柔らかな髪をいじくりながら顔をしかめていた。

確か、俺がこいつなつてしまつたのはあの時のはずだ・・・

ある秋の日、高校一年だった俺は先輩と、葉がもう十分に紅く色づいた山道を歩いていた。

「ちょっと 君。もう少し立ち止まって景色を楽しみながら行きましょよ」

「IJの景色より頂上の方が綺麗だと思いますが。もしかして先輩はもう疲れてしまつたんですか？」

後ろを振り向くと案の定、額に汗を浮かべながら邪魔にならないよう髪を一本に後ろでまとめた女性がこちらに来ている。

「そりや、運動してこなかつたオタクにはこの山道は厳しいわよ」
何故か自慢げに胸を反らした。

「そんなに堂々とオタク宣言をしなくても・・・あ、もうやめそう頂上みたいですよ」

とりあえず、ボケた彼女を無視することにして前を向くと上に向かう道が途中で消え、視界が開けているのが見えた。それを見ると彼女は、先ほどの疲れたような顔が一遍してパッと明るくなり全力で走り出した。

「全く、ペース配分を考えたら絶対頂上に着いた瞬間に動けなくな
るだろ」

独り言を呟きながら歩いていると数十秒後、頂上から先輩らしき叫
び声が聞こえた。

急いで先輩のもとへ走つていくと何やら黒い大きな物体が見えた。

（いや・・・まさかとは思つがアレが出たりはしないだろ？）
嫌な予感がするが、なるべくその予感が当たらないことを祈りなが
ら先輩のもとに着いた。

そこでは、見事に腰を抜かして一步も動けない先輩とその先輩の2
倍はあると思われる熊が対峙していた

見事に予感的中である

とりあえず熊の意識を先輩から逸らすために手近にあつた自分の拳
より少し小さい石を2、3個拾つて、熊の顔田掛けて投げつけた。
コントロールにあまり自身は無いが、無事当たったようだ。

「おい！ ひつちだ！！」

叫ぶとその熊はこちらにゆっくりと振り向いた。と同時にその熊は
何か悪いキノコでも食べたのかヨダレを垂らしながらこちらへ俺を
食い殺さんという形相で走り寄ってきた。

「先輩！ 僕が時間を稼ぎますので早く山を降りてください！」

「でも 君が・・・」

「……から……」

よつやく立つことが出来た先輩が自分の心配をするが叫び返すと、素直にもと来た道を駆け下りていった

・・・

ここまで一貫想い出すのを止めた。部屋の中心に直立不動で考え込むのは妙だと思ったからだ。ひとまず、ベッドで寝転びながら考えることにした。

確かにここまで普通ではなかつたが、こうなる原因はなかつたはずだ。

「あの後だつたかな……。確かにその次あたりに確か事の発端が起きた気がする」

先輩を山から逃がした後、俺は熊から逃げ続けた。とにかく熊の直線状に入らないように縦横無尽に駆け回りながら必死で山中を逃げ続けた。

すると・・・

「なんで俺らまで巻き込まれてんだよ……」

「それはこっちのセリフだ……！」

途中から何故か親友一人が俺の隣を一緒に走っていたのだ。

「折角、お前があのオタクだけど美人先輩と一人つきりで山でデートをするって聞いたから冷やかしてやろうと思つて、隠れて見ていたのになんで俺らまで死にかけるんだよ」

「そりやあ、その野次馬根性で来た結果だろ？な」

俺とバンダナを巻いた親友が軽くいがみ合つていると、その間にも

う一人の眼鏡をかけた親友が声を発した。

「そんなことよりさ、とりあえずあの熊は多分どれだけ逃げても追いかけてくると思うから、あいつを倒す策があるんだけど一人とも聞かない？」

その言葉にいがみ合っていた俺たちは一旦その提案に耳を傾けた。

「おい！ ここでいいのか！」

走り始めて大分経つたろうか。やはり熊は執拗にどこまでも追いかけてきた。そこで、俺たちは策どおりに熊が断崖絶壁に突つ込むように、そこを背に立っている。

「うん。タイミングが重要だから3、2、1で一斉に横に飛んでね」策というのは単純にあの熊が突進してくることしか頭にないのを利⽤して断崖絶壁で待ち構え、ぎりぎりで避けて熊だけを落とすという寸法らしい。

・・・それにしてもこの策は本当に大丈夫なのだろうか。

そう悠長に考えている暇もなく、熊が俺たちのところまで後、数秒の時になつた。

「それじゃ。 3！」

「2！」

3人が一斉に身構えた。そして後は横に飛べば済むはずなのだが・・

・
「いち！ ってえええ！ ！ ？」

動かそうとした足が動かなかつた。そして更に驚いたことに、顔以外は全く動かなかつたのだ。

他の二人も全く同じ状況らしく、突然の出来事に目を丸くしている。

そうして田の前の熊は全く勢いを衰えさせず、突つ込んで俺たち3人は崖に突き落とされた。

「・・・で、この状態か」

俺は今一度再確認した変えようが無い事実に思わず盛大なため息が出た。

「一体俺にこの姿になつてビリしろつていつんだよ」

現実逃避は無理

「うーん……他に何かこれが夢だつてことを証明できるものはなにかないのか」

ベタだが頬をつねれば目が覚めるか？　いや、頬が柔らかいつことしか分からんし。

それなら……

必死でなにかないものかと頭を捻つているとノックする音が聞こえた。つと、同時に勢いよくドアが開かれた。

返事をしようとした瞬間にドアが開いたから、心臓が飛び出るかと思つたじゃないか。

見ると、俺と同じ茶髪を持つ少女がヒヨコリと顔を出していい。どうやらわざわざわざとだつたようで、俺の予想通りの反応に満足そうな顔をしていた。

「テオ！　夕食の準備出来たからはやく来ないと無くなっちゃうよ！」

「うん、わかつたよセリア姉さん」

「よろしい」

俺の返事に満足したのか、一いつ口ひと笑つて少女は出て行つた。

・・・何故自然に名前が出てきたし。

恐らくこの体の記憶だからなのか、顔を見た瞬間に名前が思い浮か

んだのだ。

セリア・ウイステリア　俺の3歳上の姉、といつことまだ6歳か。さつきの行動から見て思つた通り悪戯好きだが、誰にでも優しい？らしい。3歳の頭だからなのか印象がおおざっぱだな。

「そして俺の名前はテオ・ウィルタニア・・・・か。覚えやすい名前でよかつた」

さすがにこれ以上考へても仕方ないと想い、家族の居る所へ行こうと扉を開けた。

どうやらこの家は2階まであるようだ。そのまま階段を下りて行くと家族全員が食卓に着いていた。

そして、俺が席に着くと左田に二本の大きな傷跡をもつ父が口を開いた。あの傷跡についてはなんの情報も思い浮かばないということは子供たちは何も分からないうらしい。

「よし、皆集まつたな。それじゃあ、”頂きます”」

父の号令に続いて他の四人も手を合わせて言つた。どうやら、この食前の文化は同じらしい。

それから皆、談笑しながら少し固めのパンとブドウを1、2粒食べた。

俺は出来るだけ状況把握するために会話に聞き入っていた。

セヒド気づいた事は

まず、こじは國の中ではなく村に位置し、農作物を作つて税金を領主に納入してること。

そして、識字率はそこまで高くなく、我が家では父と母以外には長男のカーンが文字の読み書きが少し出来る程度だといつこと。家に本はたくさんあるのは確認したから今度文字の読み方を教えてもらうか。

他にも魔法があつたり、モンスターがいたりなど挙げてみるとくらうでも出でへる。

まあ全てをまとめるところは日本ビリヤか世界すり違つひじ。

食事を済ませた後、何をしようかと考えていると真面目な兄からもう寝ろと言われた。

いやいや、あんたも8歳ですからね？俺と5歳差だからそんな変わらんでしょうよ。

姉さんもなんで私はまだ寝ないのよ？みたいな目で俺を見ていんですかい。

もうこいや、家の外で情報収集をするのは明日からにして今日は早く田に寝るとするか。

嬉しい誤算

「・・・目が覚めても何も変わらなかつたか」寝る前にもしかしたらとは思つたが、その期待は夢く散つてしまつたようだ。

とりあえず、まだ目覚めきつていらない脳を元に戻すために窓から顔を出してみた。

「わあ・・・空気が美味しいとは驚いた」

早朝の冷たい空気を大きく吸い込むと同時に今まで感じたことがなかつた空気の味が体にしみわたり、感動して思わず口に出していた。

この世界では地球より環境破壊は進んでないとは良いことじやないか。

半眼で外の景色を眺めながらそんなことを考えているつり頭の回転も通常時に戻ってきてから、俺は外を眺めるのは止めて、ベッドの上に座り込んだ。

「さてと、情報収集をするにしてもまず何をしようか」

手帳をしながら俺は今日の計画を立てていた。

計画を立てるといつても村の状況すら分からぬのだから特にこれといったものも立てれないのだが。

それにしてもこの寝癖は日々手強いいな。これだと外に出たら恥ずかしいだろう。

もうじつのことしばらく家から出ないで本を読み漁つてみるか。

「・・・本が読みたいな」

「本？」

「うわあ！ カーン兄さん！ いつのまに」

突然の声に振り向くと、いつからいたのかカーンが背後に立つていた。

「お前、昨日から少し静かだとは思っていたが、そんなことを考えていたのか」

どうする。まさか俺が本を読むことに対する違和感をなくすための言い訳を考える前にこんな形で来るのは思わなかつたぞ。一旦、本を読む気はないと言つてこの場をやり過ごすか？ いや、それは駄目だ。ここでは学ぶ事をそれほど重視していないのだとしたら、次に本を読むチャンスは一気に減るだろ？ ならここは即席の言い訳でカーンに読み方を教えてもらつて後は自分で情報収集するか。

「兄さん。ちょっとお願ひがあるんだけどいい？」

俺は意を決して口を開いた。転生前ではあまり喋らなかつたことがここで悔やまれるとは思わなかつたよ。・・・全く上手い言い訳が思いつかない。

「なんだテオ？ 俺に出来ることなら何でもいいぞ」

「うん。僕、最近本を読んでみたいんだけど・・・。兄さん。文字の読み書きを教えてくれない？」

「そういうことだったのか・・・。お前の歳なら外で遊ぶ方が本を読むより良いと思うんだけどなあ」

どうやらカーンは俺に実際の年齢、つまり3歳なら3歳らしく外で遊んでほしいようだ。

俺も出来る事ならそうしたい。転生する前では何度も人生をやり直したいと思つたことはいくらもあるからな。とりあえず人生を自縛靈が成仏する並に満足したい。だがここは日本じゃない。ファンタ

ジー（昨日の夕食で聞いた限りには）溢れる異世界だ。なのだから普通の男子は絶対に興味を抱く。勿論俺もその男子の一員なのだ。
・・・

まあ何を言いたいのかというとだ。

・・・俺はこの世界をこころゆくままに堪能したいのだから予備知識を身につけておきたいことについてことなんだよー！

「ねえ。お願ひだよ兄さん。僕一本を読んでみたいんだ」

ここはもう玉碎覚悟でこの3歳という子供ならではの可愛らしい容貌を利用しての愛くるしい表情と少し潤んだ目でカールを上目遣いで見つめた。正直かなり恥ずかしい。

「・・・・・・

「・・・・・・ダメ？」

しばらくカールを見つめていると不意にカールが突然俺の頭をなで始めて、その手を動かすことを止めずに言った。

「可愛い弟のためなら駄目なんてことは有り得ないさ。丁度今日は書斎が空いてるから一緒に勉強しよう」

・・・え？なにこれ。まさかのさつきのが決め手になつたって感じなのか？

もしかしてここいつづけ口・・・ま、まあいいや。その辺については

気にしないでおこひ。

「・・・あ、ありがとうーー。兄さん。それじゃあ朝食を食べた後に
お願いーー！」

予想外の結果に少し変な返事になってしまったが、特に氣にもされ
ずにそのままカーンが部屋を出て行つたのは助かつた。

「・・・・子供の体つて意外と便利なんだな」
改めて子供であることの威力を実感した一瞬だつた。

「それじゃあテオ。ちょっと読んでみたいと思う本を適当に持つて
きてくれないか？ 自分が読みたい本の方が楽しいだろ？？」

「うん」

俺は軽く返事をして本棚に向かつた。約束どおり朝食の後、カーン
から文字の読み方を教えてもらつために一人で家の書籍にいるのだ。
そして言われた通り、適当に選ぶつもりで本を見ていたが俺は愕然
とした。

題名が日本語で書かれてあるのだ。

目を擦つてもう一度見たが、間違いなく内容も日本語で書かれてあ
る。

(これなら兄さんに教えてもらつ必要は無い。適当に読み方は聞き
流しておこう)

文字が日本語で書かれたあると分かつた以上、最早8歳の男子に1
6年間分の知識量が備わつた俺が教わることなどなにもないだろう。
あると言えば常識ぐらいだが・・・まあそれも本を読んで知つて

いけば何も問題はない。

ならなにを選ぶか

意外と本棚には多くの種類の本が並べられており、世界の町」との説明や、種族、魔法の使い方が書かれているような本がある。本当に使えるかはあまり期待出来そうもないが・・・。いつか時間があつたら試してみるか。

とりあえず、勘違いされそうな小難しい本じゃなくて、ここは男なら誰しも憧れを抱くであろう武器について書いてある本でも選ぶか。

「テオ。選んできたのか？」

「うん。これなんだけど・・・」

そう言つて俺は特に分厚すぎない程度の本をカーナンに差し出した。

「”武器大全”・・・少し難しいが大丈夫なのか？」

「うん。大丈夫。文字の読み方だけでも教えてくれればいいよ」

「分かった。なら始めよつか」

それからは、武器の説明を活用して文字の読み方を教えてもらつている・・・ふりをしていた。実際に内容を見ているうちに日本語と全て一致していたから教わる必要が無くなつたのだ。

そして、この無意味な講義が終わったのは教わり始めて2時間後のこと、その時には疲れきったカーンの顔と初めて見た武器を目をキラキラさせて見ているテオの顔があつたそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5673z/>

自由きままに異世界記・・・と熊

2011年12月27日21時45分発行